

「東大卒」次官が消える

霞が関の事務次官級ポストに非東大出身者が続きそうだが、「革命」に揺れた世代がもたらすのは、霞が関の再生か。それとも衰退か。

1973年の春、「官庁の中の官庁」と呼ばれた大蔵省（現・財務省）は戦後最大の転機を迎えていた。

当時、首相だった田中角栄は大蔵省の幹部を呼び出して、独特のタミ声で迫った。

「参院選もあるので、アツといわれる大減税をやりたい」

蔵相の頭越しに、首相が次官、局長に直言する。大蔵一家の牙城に政治家が介入し始めた。

「異変」は続いた。大蔵省の高

級官僚の出身校といえば東大。

しかも最難関の法学部卒が集まる。戦後の事務次官45人のうち、例外は4人。それが、73年入省組の東大法卒は1人だった。

機動隊突入で入試中止

原因は東大紛争にある。69年1月、全共闘が占拠する安田講堂に機動隊が突入した混乱でその年の入試は中止となった。その4年後の73年入省組は、京大卒や一橋大卒が目立った。

73年組の一人、金田勝年（前参院議員）は言う。

「多彩な人材が集まれば組織は活発になる。東大以外の出身者でも活躍できる。そんな基盤を作る大きな節目だったはずだ」

銭谷真美（文部科学次官）と大教）とは、秋田高校とともに学び、一浪して東大受験の機会を逃した苦い経験を共有する。

大蔵省73年組には新井将敬氏もいた。政界に出ると改革派のホープから醜聞の渦中へ。流

転の人生は、接待疑惑で揺れた大蔵省の末路とも重なる。

政府の経済財政諮問会議で民間議員を務める伊藤隆敏（大蔵省）は採用されたが、辞退し、進学した。

「能力は前後の代と変わらないのに、東大入試がなかったというトラウマに囚われ、その後の人事でも損をした世代。東大卒

がどんな価値を持つのかを試す壮大な実験でもあった」

入省年次に沿った「順送り」が慣例の次官選びでは、73年組の処遇が焦点となっている。すでに文科省、金融庁では東大卒以外がトップに就いた。経済産

業省では、いずれも京大卒の鈴木隆史氏か望月晴文氏が本命視されている。国土交通省や総務

省でも、73年組「非東大」卒次官が誕生する可能性が高い。73年に大蔵次官だった相沢英之氏は当時を振り返る。

「次の採用で100人採ろう」

73年組は採用を絞ったため、74年組の採用にあたり、こう提案を切り出した。

財務省は73年組飛ばし

門戸を広げて、優秀な人間を確保したかった。当時の秘書課長だった松下康雄氏（後の日銀総裁）はそれを聞いて驚いていた。省内からは抵抗にあった。

「増えた分、再就職先に困る」30人余りまで譲歩した。

その財務省では、73年組を飛ばし、74年入省の杉本和行（主計局長、丹呉泰健官房長が昇進し）そうだ。いずれも東大法学部出身。同期で2人の次官が輩出する可能性が高い。

相沢氏は最近の東大法学部生の「官僚離れ」が気に掛かる。「東大出が必ずしも優秀というわけでもないが、出来の悪い人間に権力を握らせることだけは避けなければならない」

編集部 常井健一



1969年の東大入試中止に揺れた「団塊世代の末っ子たち」を霞が関で迎えたのは、オイルショックと角福戦争。「非東大」の73年組を哀れむ声も各省内にはあった

「73年組」の顔ぶれ

現在の役職など	出身大学・学部
新井将敬 故人・元参院議員	東大経
井戸清人 日本銀行理事	東工大理
加藤秀樹 構想日本代表	京大経
金田勝年 前参院議員	一橋大経
佐藤隆文 金融庁長官	一橋大経
竹内洋 日本政策投資銀行理事	東大法
牧野治郎 国税庁長官	東大経
増井喜一郎 日本証券業協会副会長	京大法

現在の役職など	出身大学・学部
小川洋 内閣広報官	京大法
北爪由紀夫 駐カタール大使	東北大法
鈴木隆史 経済産業政策局長	京大法
田中伸男 国際エネルギー機関事務局長	東大経
角田周一 元財団専務理事	東大工
橋本城二 元財団専務理事	一橋大経
望月晴文 資源エネルギー庁長官	京大法
山田晴信 香港上海銀行在日副代表	東大工

現在の役職など	出身大学・学部
銭谷真美 文部科学事務次官	東北大教
小林芳雄 前農林水産事務次官	東大法
竹中平蔵 慶大教授・元金融相・元経済財政相	一橋大経
伊藤隆敏 東大教授・経済財政諮問会議民間議員	一橋大経

※73年に入省した主な人物。同年大卒の関係者として竹中、伊藤両氏を加えた